

(最優秀おはなしエンジェル賞 小学生中高学年の部)

夢

小六・窪田 庸雅

だれでも、子どもの頃、空を飛びたいという夢を持った事があるのではないだろうか。

その昔、空を飛びたいと言う事が非現実的な「夢」だと言われた時代があった。それを現実にしたのが科学者ゲル・フライヤーの、「自生羽薬」の発明である。この薬は、一日三回服用するだけで、約二週間でけんこう骨の付近から羽が生える、という薬である。ネットなどで気軽に買える事から、大売れした。

日本に住む小学六年生の太郎の家では、毎日、妹の花子のおねだりがやまない。

「ねえお薬買ってよ。私も羽がほしいのよ。みよちゃんなんかねえ、もうとっくにお空を飛んでるのよ。お空にお家もあるのよ」

すると、おばあちゃんが、
「あら花ちゃん。お空のお家すてきね。おばあちゃんも行ってみたいわ。羽があるとどこへでも行けるし、杖も車イスもいらないんですって」

それを聞いていたおじいちゃんは、

「わしゃそんな羽なんぞ信用できんわい。科学かなんだか知らんが、副作用もわからんし飛んだとしても落ちたらどうする。骨でも折ったら寝たきりだ」と声を荒げた。

おかあさんは、

「いいじゃありませんかお父さんこれも時代の流れですよ。昔、昭和の時代に三種の神器と言われた、テレビ、洗濯機、冷蔵庫だって初めはみんな疑ってあまり買わなかったけど、今はなくてはならない物になっているじゃありませんか。自生羽葉や、空中住宅だっていずれば、なくてはならない物になるんじゃないでしょうか」

「そんなもんかねえ」とおじいちゃん。

その時、みんなの話を聞いていたお父さんは、

「まあうちの会社でも空中住宅手当てが四月から出るらしいしね」と言った。

その時太郎が、

「お父さんニュース速報だ、国民のみなさまは必ず見て下さいだつて」

ニュースが告げた事は、

「ただいま国土交通省館の前から中継です。厚生省から認可の下りた自生羽葉の工場から出た排水が海に流れ、三ヶ月の間に地上に人間の住む事が不可能になると思われます。ですのでできるだけ早急に自生羽葉服用の上で羽が生えた事を確認し、空中住宅へ移動を開始して下さい。なお空中住宅をお持ちでない方は、北緯三十度上空の〃仮設空中住宅0・2・3郡〃に移動を開始して下さい」

ここまで告げるとアナウンサーは大きく息を吸い、

「タダチニ、イノチヲマモルコウドウヲトツテクダサイ」と叫び、放送は終了した。

それから、二世紀の月日が流れた。

今日は、太郎の二百十二歳の誕生日である。今や人間の平均寿命は、二百歳を超えた。



画：村尾 亘

あれから二世紀、近年地上で五百台ほどのロボットが緑を戻すべく働いている。そのおかげで、地上に緑が八十パーセントほど戻り始めている。完全に緑が戻るまであと二年、と言われている。一部の人は、二年後に向けて羽を無くすための薬を作らされている。現代人にとって羽はバカげていると思われる。羽など捨てて、地上に降りる事こそが素晴らしい、空など飛ばず、羽の無い本来の人間の姿で地に足をつけて歩く、そういうくらしこそが良いのだ。

人は再び夢を見る。

「地に立ちたい」と。